

学校活動部門 講評

國學院大學 文学部 教授 高橋 大助

学校活動部門・講評

未曾有の事態にあって、学びも困難な状況に追い込まれました。教師も生徒も工夫を重ねて学びの在る〈日常〉を維持した、この苦しい出来事は、しかし、大いなる経験としてあなたの生きる力となることでしょう。と同時に、学ぶということの本質を改めて問い考える契機ともなったはずです。

とはいえ、こうした言葉は、学校が見舞われた学びの不自由さの前では、虚しく響くかもしれません。去年なら、本当なら・・・そう嘆く言葉を打ち消すことは、まだ、私にもできません。

「学校」を越境し、「地域」をフィールドとして「伝承文化」に学ぶ。—このコンテストが標榜する、もう一つの学びが、学校での学び以上に困難を抱えていることは想像に難しく、開催さえ危ういのでは、と私は危惧していました。しかし・・・。

杞憂、という言葉がありますね。私の心配はまさにそれでした。私は恥じて、顔を赤らめなければなりません。それほどの成果が寄せられました。

優秀作は三つ。いずれも、学びの体験として優れたものでした。

地域に存在する幻の後発酵茶「石鎚黒茶」普及のためのプロジェクトを試みた愛媛県立西条農業高等学校の試みは、生産減少の理由を検討し、生産に実際に関わることで見えてきたことを生かすという、まさに「伝承文化」に学び、今に生かす、という典型的な試みであったと思います。植物性乳酸菌が豊富なこの黒茶（同系統の高知の碁石茶しか飲んだことないのですが）同様、この経験は参加した生徒の皆さんの身体に沁み渡ったことでしょう。そこから「石鎚茶」とともにあった〈生活〉について、さらに探究が進み、新たなあるべき〈日常〉の形成に役立つことがあれば、伝承文化が未来への扉となるはずです。

栃木県立栃木農業高等学校の活動も、実にダイナミックで、参加した生徒の皆さんの躍動する身体が見えてきます。「座敷帚」という語感からして「蔵の街」にふさわしいこの日用品が、需要も作り手も減少して、このままでは存在自体が幻となる。そんな状況に抗するべく、原材料であるホウキモロコシの栽培から取り組みました。数少ない職人さんに習って、実作を試み、「座敷帚」の作り手となり、次には、箒作りのワークショップを通じて、ものと技術の伝承を試みました。それだけでも、文化の伝承といえますが、さらに、「座敷帚」の製作や使用にかかわる話を丁寧に掘り起こし、記録し、引き継ぐことができれば、箒はさらにリアルに輝くように思います。

福岡県立朝倉高等学校の活動は、先の二校とは趣が異なり、「探究」という言葉にふさわしいものでした。地域の山の中に埋もれた、使われなくなった石橋に隠された秘密の発見は、

メディアが報じ、地方議会を動かして、橋の価値の認定・保存へとつながります。現地踏査と文献探索・解読、そのとき出来ることに〈全集中〉して臨んだ結果が、地域を動かしたわけです。この出来事がまさに「梯」となって、さらに、この橋が見てきた人々の営みが少しでも明らかになれば、失われたものの再構築が可能となるかもしれません。それはただの過去ではなく、地域の明日を開くための「歴史」として立ち現れるに違いないでしょう。